ダロウェイ夫人のパーティー

Mrs. Dalloway's Party

大　林　幹　明

Virginia Woolf の短篇集 *Mrs. Dalloway's Party* の最初の作品 'Mrs. Dalloway in Bond Street' は，自宅付近の国会議事堂の時計が11時を知らせる音を聞きながら Mrs. Dalloway が手袋を買いに出かける場面から始まり，店内で外の通りに起った爆発音を聞くところで終る。その間，時間としてどれだけが経過したかは，判然としない。しかしむしろここでは，彼女が通過する場所の方が重要だと思われる。彼女の行く店は，Bond Street にあるが，Westminster 地区にある自宅から，次のような経路で目的の店へ着く。まず，Admiralty Arch まで行く: Mall の大通りを Buckingham Palace へむかう: Green Park を抜ける: Piccadilly を通る: Bond Street の店へ来る。この作品では，以上の描写に約半分，その後の店内の様子について約半分という具合に，2つの部分にわかれている。

前半の部分は，事実としては，先に示したような経路を通るが，その間，Mrs. Dalloway の頭に浮かぶことをいくつか例示してみる。最初の議事堂の時計がまだ鳴っている時と，その直後の時間には，仕事に関係することと，たまたま，Hugh Whitbread に会ったことから，彼の配偶者の事。Buckingham Palace へ向っている時は，Victoria 女王や，現国王の事。Green Park に入ってからは，特に1つのことには限定されない。Bond Street に入ると，まずそこにある有名な書店，Hatchard の店頭に陳列されていた本を見て，Shakespeare やその他の作家の本の事。次いで彼女の幼なじみで，今は Whitbread の妻となっている Milly に贈物とするのにふさわしい本は何かという事。この店を通過して，道路

を横切ろうと車が通りすぎるのを待ちながら，昔の Bond Street の事。このようにして，小説前半においては，それぞれの場所を契機として頭に浮ぶ事が述べられる。ここでは，時の経過というより，場所の変化を通じて彼女の意識にあらわれたものが何であるかを，読者は知ることができる。

Bond Steet の店に入って彼女は手袋を品定めするわけであるが，ここでは場所が店内に固定されるために，彼女の意識の変化を知る手がかりは，別のものとならざるを得ない。それは，同じ店内にいる別の女性である。この女性の事と，Mrs. Dalloway に接する店員との応対が以下の描写の中心となる。店員とのやりとりの間，彼女の意識は幾度か変化する。例えば，店員の休暇について話をし，その事がもとになって，彼女自身がかつて休暇を，Brighton ですごした事へと発展する。Bond Street の交通の音で Brighton から再び現実に引きもどされ，店員のもってきた白い手袋を見るが，それがもとになって，再び別の事へと連想が移り，値段を告げる店員の声で三度，現実にもどる。最後は，店の外で大きな音がして，それによってまた思いが中断されるが，同時に店内にいる件の女性が誰であったかに気がつく。

この作品では，結局自宅を出る場面から，最後の店内での場面まで，外界の場所と時間の変化に応じて，Mrs. Dalloway の意識がどう変化したかが述べられるという形式になる。時間についていえば，最初が11時であることは事実であるが，最後については不明である。しかし，大略の場所の移動と，店内での時間の経過を考えれば，ほぼ見当をつけることは不可能ではない。そしてその外側の場所的，時間的世界のひろがりに対応して，意識のうちにあらわれるそれのひろがりとの差は，非常に大きいものであることに気がつく。外側の客観的世界は，Westminster から Bond Street までのさほど広くもない範囲，時間的にもせいぜい2時間程度であるのに対し，意識内に展開される主観的世界においては，場所は London からはなれて Brighton まで広がることもあり，時間は100年さかのぼる場合もある。小説中の時間，空間と，小説中に展開された世界のそれとの相互関係は，このように，圧倒的に後者が大きい。

'Mrs. Dalloway in Bond Street' においては，主として場所の移動に対応して Mrs. Dalloway の意識内に展開する世界が変化する。同じ短篇集に収められた 'Ancestors' においては，ちようどその対立点にあるような構造をなしている。この作品は，Mrs. Vallance が，Mrs. Dalloway のパーティーで同席した Jack Renshaw という男と会話をするという体裁をとっている。しかし実際には，会話といっても，ほんの1～2回言葉を交すだけであり，あとは彼女が考えたことである。その内容は，自分が生まれた土地，一族のことから始まり，もしそこでの生活が続いていれば，Renshaw の下らない話に耳を傾けたり合ずちを打ったりする必要はないはずだと気ずくことで終る。その間，"Was she Scotch?" と，"What a lovely frock!" という Renshaw の言葉が入るので，厳密には，時間の経過が無いとはいい得ないとしても，その部分が無視できる程度に短いものとすれば，時間の経過はないことになる。パーティーで出会った Renshaw の下らない話し，クリケットのゲームを見ることは好きでないという言葉に耳を傾けざるを得ないと言っているその一点に時間は集中していると考えるべきである。ところが，Mrs. Vallance の意識についていえば，まず場所が，生まれ故郷の Scotland へ移る。同時に時間は彼女の幼い頃にさかのぼる。当然そこに登場する人物も，両親や，父親の友人となり，会話も彼らのものとなる。次いで，Elliotshaw という，Northumbria の境界地に移り，その広々とした北方から，London へと移る。家が軒を並べ，狭い場所に多勢の人々が集まる，London，それに伴って両親を中心に集まる教養ある人々と比較すると，数段劣る人々。この作品では，まず時間と場所を London の Mrs. Dalloway のパーティーの場に設定する。そして Renshaw との会話を機に，場所を Scotland，時間を彼女の幼少の頃へとシフトさせる。そのようにしてシフトされた場所と時間を次第に London の現在へと近ずけ，再び Mrs. Dalloway のパーティーの席で Renshaw と話し会っている場へと導く。その導びかれた場は，時間と場所をシフトさせる契機となった最初の会話に他ならない。ここでは，現実の場での時間の経過を極限まで圧縮し，その中に可能な限りの時間のひろがりを示した。

Mrs. Dalloway's Party に収められた7つの作品のうちから2つを選んだのだが，この2作について，次のように言うことができる。最初の作品は，ある小説の現実の時間が，いわば開かれていて，時間は自由に流れており，そういう状況の中で物語りが語られ，あるいは印象が展開される。当然そこでの時間は，過去，現在と，やはり自由に変化する。それに対して，後者の作品では，現実の時間は，いわば閉じられていて，瞬間，あるいはそれにきわめて近い状態になっている。しかしその中に展開される物語りでは自由に時間と場所が移動するという構造になっている。そして，他の作品についていえば，いずれもこの2作の間に位置するといえる。その場合，小説の現実の時間が短かければ後者に類似し，長くなると前者に類似する。例えば，'The New Dress' は，Mrs. Mabel が，Mrs. Dalloway のパーティーに到着した時から帰るまでと時間が区切られている。時間が明確に区切られるという意味において後者に類似してはいるが，若干の時間の経過があるという意味において完全に同じであるとはいえない。他方場所は限定されるという意味において，'Mrs. Dalloway in Bond Street' とは相違するが，'Ancestors' とは類似してくる。しかもこの場合，場所がパーティーの場であるという点は興味深い。しかし全体をみて考えるならば，この作品は，両者の中間に位置するものである。理由は Mrs. Mabel がパーティーの席で考えることをとりあげてみれば明確になる。'Mrs. Dalloway in Bond Street' においては，Mrs. Dalloway がそれぞれの場所で頭に浮かべたことは，特にこれといって統一があるわけではない。自由に連想が展開されている。これに対し，'Ancestors' においては，Mrs. Vallance の先祖ということが常に表面に出，すべての連想はこのことを軸に動いていた。特に彼女の先祖がいかに立派であったかということが連想の中心にきていた。'The New Dress' においては，統一した，あるいは連想の軸になるものは，表題となった新らしい洋服である。しかし子細に読むと，'Ancestors' ほど厳密にその主題について述べられているわけではない。結局形式のうえでも，内容的にも，この作品は，前二者の中間に位置するものなのである。

当該短篇集に含まれる他の4篇についても，いずれも何らかの形においてある枠組をもった形式になっている。その枠組は主として場所的なそれの場合と，時間的なそれの場合に分けられるが，とにかくその枠の中で展開される物語りは，その場所的あるいは時間的枠組を超えて発展するという手法になっていることが特色である。そこで，それらの中で特に注目すべきいくつかの点について指摘する。まず，'The Man Who Loved His Kind'。Prickett Ellis は，Richard Dalloway に会い，夕方のパーティーに招待される。パーティーの席で，Ellis はそこに集まった人々となじまず，異和感を持つ。それを彼は，Miss O'keefe に述べるわけだが，ここで弁護士としての Ellis の回想となり，パーティーという時間と場所の枠組から，かつての事件依頼人へと話は発展する。そして，パーティーに参加した人々と，事件依頼人との性格の相違が示され，彼の感じた異和感の説明がなされる。'Together and Apart'。場面は同じくパーティーで，Mr. Serle と Miss Anning が，Mrs. Dalloway によって引き合わされるところから始まる。この作品は，二人の会話に関する限り時間的に短い。実質的な2人の会話は，10回程度の応答があるだけであるから，時間にしてそう長い会話を交したというわけではない。しかしその間に，主に Canterbury を中心とした二人の昔の世界と，それに関連した想念の世界が展開されて時間と場所の枠組から大きくはなれたものとなっている。その基本的パターンは，最初に挙げた2作と同様である。ただここでは，それぞれの会話の言葉が出るたびにそれを契機として昔の世界あるいは想念の世界が展開されるという点で異なる。'Mrs. Dalloway in Bond Street' では，Mrs. Dalloway の意識に浮ぶ物あるいは連想の糸の契機となるものは，その時々の偶然のものであった。Buckingham Palace 前の Victoria 女王の像から，Kensington Garden と，そこで女王におじぎをするようにいわれた事。宮殿に国王の滞在を示す旗があるのを見て，夫 Richard がかって女王に会ったことがある事。Bond Street にある有名な書店の店頭に展示された本から，Shakespeare の *The Sonnets* の事や，Phil と Dark Lady について議論した事などである。それぞれの契機になった事項と，呼びおこされた物の内容には

それぞれ関連はあるが，何か特定のキーがあって，それがあると何か決まったものを必らず連想するという構造になっているわけではない。しかるに，'Together and Apart' では，必らず1つの会話の文が基礎となって連想が始まる。Mr. Serle と Miss Anning が紹介されてしばらくして，彼女は尋ねる。"Do you know Canteruury?" これが基になって Mr. Serle の意識の世界は次のように発展する。

> Did he know Canterbury! Mr. Serle smiled, thinking how absurd a question it was—how little she knew, this nice quiet woman who played some instrument and seemed intelligent and had good eyes, and was wearing a very nice old necklace—knew what it meant. To be asked if he knew Canterbury. When the best years of his life, all his memories, things he had never been able to tell anybody, but had tried to write—ah, had tried to write (and he sighed) all had centred in Canterbury; it made him laugh.(1)

こういった彼の思いは更にもう一節つづいてようやく 'Yes, I know Canterbury',.... という答えとなる。それに応じて Miss Anning が感じた事がつづく。以下2人の連想を引き出す契機はいずれも短い会話である。その連想の中で展開される世界は昔の Canterbury を中心としたそれである。読者は一方で，London の Mrs. Dalloway 家にいながら，他方で別な世界を経験する。*Mrs. Dalloway's Party* に収められた短篇の中で，Woolf は登場人物の意識の内にあらわれる世界を読者に呈示するに，様々な方法をもってした。

Woolf のもう1つの短篇集，*A Haunted House* には，*Mrs. Dalloway's Party* の中から抜かれた4篇を含め，18篇の作品を含むが，それらにも同様の工夫，実験が行なわれている。'An Unwritten Novel' は，London から，Eastbourneへ行く列車に乗り合わせた乗客について想像をめぐらす体裁で話が進められている。

全体が4つのエピソードに分けられるこの作品は，時間の流れは開かれているので，形のうえでは 'Mrs. Dalloway in Bond Street' の変型といえる。'Kew Garden' は，ここの庭園で目の前に展開される4組の人間模様を描いたもので，場所が一定してそこを4組の人々が通過していくという形式である。それは，'Ancestors' において，時間が固定されていたのに対し，ここでは場所が固定された形式に変型されたわけである。'The Mark on the Wall' では壁にあるシミのようにみえるものから連想が展開する。この場合，展開される連想を呼び出すものは，題名となった壁のシミである。このシミが何であるかは最後で明きらかになるし，また読者はそれが何であるかを常に念頭に置きながら，推理小説を読むように読みすすむが，形式的には，'Together and Apart' の変型である。'Together and Apart' で連想の契機となったものは，2人の会話の文章であったものが，ここでは，壁のシミへと変っている。同様に，'The Searchlight' では，'The Mark on the Wall' のシミが，探照灯の光に変ったといえる。一方，'The Shooting Party' のように，最初と最後の部分で，London へ向う列車の中と場所を限定し，時間的にも London へ到着までと巾をもたせながらも枠組を設定し，その中で，昔の鳥撃ちと，旧家の没落を描いている。ここでは，枠組がはっきりしているという意味で 'Ancestors' に似るが時間が零ではないという意味においてやはりその変型ということになる。はっきりした枠組によって限られた構造となると，'Moments of Being.'*"Slater's Pins Have No Points"*' も同様で，この場合は始まりが，"Slater's pins have no points—don't you always find that?".... に始まり，'"Slater's pins have no points," Miss Craye said, ...' と終る1つの枠組をもっている。

このように，Woolf の短篇小説集，*Mrs. Dalloway's Party, A Haunted House* に収められた作品の多くには，一定のタイプがあり，あたかも彼女がそういったタイプの小説を一つの小説理論の実現のために用いていたと思わせる印象を与える。いいかえれば，彼女には確固とした小説理論があって，それに基づいて一定の主題を様々な変奏曲として読者の前に提示したと言えそうである。

Virginia Woolf は，*Mrs. Dalloway* の，Modern Library 版に付した序文で次のように述べている。

> The book [*Mrs. Dalloway*], it was said, was the deliberate offspring of a method. The author, it was said, dissatisfied with the form of fiction then in vogue, was determined to beg, borrow, steal or even create another of her own. But as far as it is possible to be honest about the mysterious process of the mind, the facts are otherwise.... The little note book in which an attempt was made to forecast a plan was soon abandoned, and the book grew day by day, week by week, without any plan at all, except that which was dictated each morning in the act of writing. The other way, to make a house and then inhabit it, to develop a theory and then apply it, as Wordsworth did and Coleridge, is, it need not be said, equally good and much more philosophic. But in the present case it was necessary to write the book first and to invent a theory afterwards.(2)

著者は，当時流行していた小説の形式に満足していなかったので自分で別の形式を作ろうとしたといわれているが実は逆だというのである。彼女は小説を書くことを，家を建てることに比較している。小説を書く場合に，一定のプランがあるわけではなく，毎日，毎週次第次第に書きすすめられて成長していく。もちろん逆の場合もあるが，Woolf の場合は，まず理論があり，それを応用する小説が生まれるのではなく，まず本を書くということが最初に来て，その出来あがった小説に理論がついてくるというのである。Woolf について，ともすると，「意識の流れ」であるといった理論があって，それに基づいて小説を書いたという考え方をしたい誘惑にかられるのは確かであるが，Woolf は自ずからそのことを否定している。

Woolf の短篇小説について，いくつかのタイプを考えてみた。実際彼女の小説は，そういった類型化しやすい作品があったことは確かである。しかしすべての作品が，類型化，可能なわけではない。例えば，'*A Haunted House*' に，'The Legacy' という作品がある。これなどは，先に述べた2つの類型あるいはその変型のいずれともいい難い作品である。

Mrs. Dalloway の序文に従うならば，まず本を書くことがあり，理論はその後ということになる。先に作品をいくつかのタイプに分類したが，このことと，彼女の序文との関連を考えると，次のようになる。もしまず理論が先にあって，しかる後作品ということになるなら，前述したような形式に多様な変化をもった作品は生まれなかったはずである。むしろ形式はもっとすっきりと統一されたものとなったはずだ。もちろん，そこに盛り込まれる内容は多種多様で，その結果，形式はいかに一様であろうとも，変化に富んだ，多くの作品が書かれただろうとは想像できる。しかし，主要な形式とその変形とみられる形式面での多様性はなかったはずである。

ところで，「理論」という範疇から，若干ずれるが，Erich Auerbach の指摘を再考してみたい。*Mimesis* 第20章 'The Brown Stocking' において，*To the Lighthouse* の時間の扱い方を次のように記す。

> However, the time the narration takes is not devoted to the occurrence itself (which is rendered rather tersely) but to interludes. Two long excursuses are inserted, whose relations in time to the occurrence which frames them seem to be entirely different.(3)

結局物語あるいは小説の時間と，ここでの表現に従うならば，挿入された出来事の時間及び外枠をなしている現実の出来事の時間という複雑な関係を生ずるが，*To the Lighthouse* 第一部第五章に基づいた Auerbach の指摘では，外枠になる事件とその枠にかこまれた事件との関係は，時間という点で全く異なっている。

その場合,

> The important point is that an insignificant exterior occurrence releases ideas and chains of ideas which cut loose from the present of the exterior occurrence and range freely through the depth of time.(4)

といわれるように，重要なことは，この外的事象，枠組となる事象を契機として引きおこされた想念の展開ということにある。

Auerbach のこの指摘は，直接には，*To the Lighthouse* についてのものであるが，これを先の短篇小説について考えてみると，次のようになる。一つの典型として示した 'Ancestors' についていえば，物語の時間といえば，Mrs. Vallance と，Jack Renshaw の会話に要した時間ということになる。しかしこれはほとんど零に等しいものであった。会話の内容は Renshaw が，「クリケットの試合など見るに耐えない」といったことと，それに関連する若干の会話にすぎない。しかしその間に，Mrs. Vallance の心に浮かんだ想念の連鎖はどうであったか。時間的には，遠い昔の彼女の少女時代にさかのぼり，場所的には，Scotland に及ぶという広がりを示した。またそのような想念の連鎖を呼びおこした始まりは，Jack Renshaw の言葉であるが，これも，日常のパーティー等の会話で何気なく交される類の言葉であって，何ら重大な意味を有するものとは考え難い。同様に，'Together and Apart' においては，Mr. Serle の心に想念の連鎖を引き起す契機も，ごくありふれた日常会話にみられる言葉である。'Do you know Canterbury yourself?' はどうみても，彼の想念を哲学的に裏ずけるようなものではないし，'Yes, I know Canterbury.' とて，それによって Miss Anning の心に浮ぶことをあらかじめ予想させるような類のものではないごくささやかな，ありふれた会話にすぎない。壁のシミはあくまでも壁のシミであって，それが契機となって呼びおこされる想念をむずかしく規定するような性質のものでないことも明きらかである。あるいはまた，'The Shooting Party' で外側の枠となる事件，すなわ

ち，London へ向かう列車のコンパートメント内の事情，'An Unwritten Novel' で，London から Eastbourne に向う列車の場合も同様である。結局 Auerbach の指摘した *To the Lighthouse* にみられる Woolf の小説の構造的特色をこれら短篇にも見出すことは容易なことであり，仮にこれを理論と呼んだ場合，Woolf が何かその理論を基にして作品を書いたのだと考えたくなるのである。しかし，すでに示したようにこのことは，むしろ Woolf が，*Mrs. Dalloway* に書いた序文の立場，まず小説を書き，しかる後理論であったという指摘のあらわれとみるべきことは前述したとおりである。

Woolf のこの種の方法について，Auerbach は，先の 'The Brown Stocking' の中で，Proust との関連を指摘している。Auerbach によれば，Proust は，この種の技法を徹底させた最初の人ということになる(5)。それと関連して，Proust の作品分析に関する Gerard Genette の *Narrative Discourse* に注目したい。この中で小説における時間の問題を分析し，小説の時間と，その小説中に物語られる物語りの時間の関係が次のように論じられている。小説の中に展開される物語りのある時点で，時間が過去にさかのぼる場合がある。その様子は，小説が始まる時点より昔までゆくか，その前後にまたがるか，あるいは手前かの三様が考えられる。また逆に，未来を先取りして，将来のことを予言的に述べる場合も，その小説の結論がでる時点を中心に三つの場合が考えられる(6)。このような時間の扱い方の分析は小説の効果を考えるうえで大変役にたつものであり，これらを，小説の語り手，即わち小説の視点の問題を組合わせると，様々な効果を生ずる場合を考えることができる。Auerbach の指摘と併せ考えるならば，次のようになる。

Woolf の小説に出てくる枠組を構成する出来事と，それによって引きおこされた想念やその連鎖に関連する時間と，その枠組となる出来事の時間如何ということである。具体的にいえば，その枠組の中で述べられる想念あるいはその連鎖の時間が，枠組の出来事の時間とどう関係してくるかである。この場合，想念の連鎖が，ある物語を形成することも当然考えられる。Woolf の短篇のうち，主

として時間系列が閉じられている作品についていえば，いずれの場合にも Genette の指摘に関係してくる。例えば本稿の考察の基本の一つとしての 'Ancestors' についていえば，Mrs. Vallance はパーティーの席で Jack Renshaw と話をする。その話によって彼女の連想は引きおこされるのだが，それは遠く昔にさかのぼる。Genette のいう枠外回想にあたる(7)。別の典型としての 'Mrs. Dalloway in Bond Street' では，枠組はゆるやかであり，Mrs. Dalloway は道を歩きながら，その時々の事情により，異なった想念を有する。そしてそれぞれの場合に引きおこされる想念は，その契機となった事件と同じ時間のものもあれば，昔のものもある。枠内回想，枠外回想が入り交っている例である。また，'The New Dress' のような興味ある変奏もみられる。ここでは小説の時間は，Mrs. Mabel が，Mrs. Dalloway のパーティーに出席した時から始まり，彼女が辞去するまでである。これに対して彼女の連想は，パーティーに到着した時点をさらにさかのぼるが，その連想の終結は，小説自体の終結でもあるという具合に，巧妙に工夫されている。しかしいずれの場合であれ，我々はこれらの短篇の中で，Woolf が時間を巧くみに操作しているということを感ぜざるを得ない。それは，再びくり返せば，あたかも最初にある一定の理論があって，それを様々に変化させて小説が組み立てられていると思いたくなる。

理論の問題と関連して，更に続いて Woolf 自身の著作である次の一節に言及せざるをえない。

> Examine for a moment an ordinary mind on an ordinary day. The mind receives a myriad impressions—trivial, fantastic, evanescent, or engraved with the sharpness of steel. From all sides they come, an incessant shower of innumerable atoms; and as they fall, as they shape themselves into the life of Monday or Tuesday, ...(8)

我々の毎日を形成することになるこの無数の原子というものをそれこそどう認識

し，それを如何に我々の目にみえるようにしてくれるか。Aldous Huxley は 'Tragedy and the Whole Truth' の中で，芸術家について次のように書いている。

> They receive from events much more than most men receive, and they can transmit what they have received with a peculiar penetrative force, which drives their communication deep into the reader's mind. One of our most ordinary reactions to a good piece of literary art is expressed in the formula: 'This is what I have always felt and thought, but have never been able to put clearly into words, even for myself.'(9)

Woolf は枠組のある構造を用いることによって，我々が常に考えながら言葉にし得ないでいたものを言葉にしてくれた。彼女のいう数えきれないアトムというのは抽象概念であるが，この抽象概念によって，我々は，日常の経験の様々な形態を一般概念，一般法則として認識することが出来るようになった。更に小説の形で具体的にも認識することが可能となった。ただ短篇小説の場合は本来的に人生の一切断面を呈示するという性質のため，ほんの一部をみたにすぎない。いわば短篇によって示されたものは，原子の一つにすぎない。しかし我々の人生は，それらの原子がいくつも集まって出来あがっている。月曜日となり火曜日になるのは，それら原子の集積された総体であるはずである。

> The seven stories in the present volume belong to the period between *Jacob's Room* (1922) and *To the Lighthouse* (1927). The novel of that period is *Mrs. Dalloway.* The stories, as it were, surround that novel. It is not necessary to read the novel *Mrs. Dalloway* in order to appreciate the book of short stories I have named *Mrs. Dalloway's Party.* On the other hand, the book of short stories does enlarge one's understanding and appreciation of Virginia Woolf's work as a whole.(10)

短篇小説について，述べて来たのは，全体としての Woolf の作品の理解，鑑賞のためではあるが，以下においては，*Mrs. Dalloway* に限って考察をすすめる。

Mrs. Dalloway の冒頭の2章は，Mrs. Dalloway が自ずからパーティーの準備のため，'Mrs. Dalloway in Bond Street' で手袋を買いに行った店と同じ Bond Street にある行きつけの花屋さんへ行く描写である。この冒頭2章が，先の短篇と同じ構造をもっていることは，短篇集の解説からみればうなずけることである。この部分で重要なことは，国会議事堂の鐘の音である。先の短篇においては，時間を知らせる時計の鐘の音は11時であった。

It was eleven o'clock and the unused hour was fresh as if issued to children on a beach. But there was something solemn in the deliberate swing of the repeated strokes; something stirring in the murmur of wheels and the shuffle of footsteps.(11)

ここでは，鐘の音はただ単に時刻を報ずる鐘ではなく，登場人物の心にある印象を与えて，その時の気分をあらわす役を演じている。同じことは，*Mrs. Dalloway* の場合も同様で，

For having lived in Westminster—how many years now? over twenty,—one feels even in the midst of the traffic, or walking at night, Clarissa was positive, a particular hush, or solemnity; an indescribable pause; a suspense (but that might be her heart, affected, they said, by influenza) before Big Ben strikes. There! Out itboomed. First a warning, musical; then the hour, irrevocable. The leaden circles dissolved in the air.(12)

ここに示された，Big Ben が鳴り始める前の一瞬の緊張した様子の描写から来る読み手のそれの高まり，鐘の音を the leaden circle とあらわす意味の深さなど，色々の解釈がある。しかしそれらと同時に，この鐘の音によって想念とその連鎖が導き出されることが重要なのである。

この一，二章は，先に示した，時間的には開かれた形で進行するタイプであり，連想の契機は，その時々の，ささいな出来事ということになる。しかしいずれの場合であれ，現実の時間は家を出てから，花屋へ行って帰ってくるまでであるのに対して，例えば冒頭の第2節ではもう Mrs. Dalloway が18才の頃の Bourton の世界という，はるか昔の描写がある。次いで隣人の目を通しての Mrs. Dalloway の印象が伝へられた後，Victoria 街を歩きながらの様々な思いが述べられるが，これは再び現時点のものに帰っている。次いで，ほんの先夜の事にすぎない Mrs. Foxcroft の様子からまた現在に戻って，昔なじみの Hugh に会う場面となる。時間も場所も自由に移動して我々の前に展開されているが，それはあたかも 'Mrs. Dalloway in Bond Street' を読むのと変らない印象を与える。けれどもこれらは，Woolf の手法のほんの一部にすぎない。

さらにこの部分で興味あることは，この開かれた時間の流れの中に，ある場所で，閉じられた形式が盛り込まれていることである。例えば，Regent's Park の場面がそれである。Lucrezia は夫 Septimus に対していう。

"Septimus!" said Rezia. He started violently. People must notice.
"I am going to walk to the fountain and back," she said.(13)

そしてその言葉どうり，しばらくして彼女は戻ってきて再び夫に声をかける。

"What are you saying?" said Rezia suddenly, sitting down by him.(14)

このようにして，夫 Septimus を公園のベンチに残し，自分は噴水まで往復して

くるという短い時間の枠組をつくり，その中で彼女の時間と場所は大きくひろがる。まず Septimus に対する現在の心境，つづいて自分の故郷イタリア，時は第一次大戦中へと，時間，空間ともにシフトさせる。再び現在へもどるが，今度は自分の心に浮かぶこと。そしてもとのベンチへ戻るという具合である。また，この少し前に，公園の上空を広告の文字を描いて飛行機が飛ぶ情景があり，この飛行機は，Mall の大通りにいる人々には，それぞれ思い思いの連想を呼びおこすが Lucrezia にとってそれは Septimus の気持をそらすちょうどよい手がかりに思えた。何故なら，医者は Septimus があまり一つのことに思いつめないようにと注告していたからである。

このように，一，二章は，時間と場所が移り変りながら，それにつれて別の大きな世界がひろがるのであるが，第三章以下になると，趣きの異なった展開となる。例えば第三章。Mrs. Dalloway が花屋から帰ってきた時から，時間の経過としては1時間くらいであろうか，前の2章と，さして変わらない。しかし場所はということになると自分の家の主として自分の部屋に限定される。またすることといえば，パーティーのためのドレスに手を加えるというただそれだけのことにすぎない。ちょうど，*To the Lighthouse* で，Mrs. Ramsay が燈台の子供にもっていく靴下の寸法を測るのを想わせる。いわば時間は流れながらも，場所が変らないが故に動きがすくなく，あたかも時もとまっているかの感をいだく。しかし彼女の想念は一つの契機から縦横無尽に変化する。この部分はいってみれば短篇集のなかでみた中間のタイプに属する作品の変奏といえる。

Mrs. Dalloway の後半はパーティーの場面となる。ここで我々は，'Kew Garden' を思いだす。この作品は，Kew Garden のある場所において，ある一人の前に，4組の人々の人生の断面を示すことにより，世界を拡大呈示する形式をもつと指摘した。'Kew Garden' の場合は，時間的にそれほど長いわけではないし，展開される人生模様も，さほどのひろがりをもつものではなかった。では，Mrs. Dalloway のパーティーではどうなるか。ここに展開される人生模様は，パーティーに出席した人々のそれに変るわけだが，それが Mrs. Dalloway の前に展開

されるという体裁に変っただけで，基本的パターンとしては 'Kew Garden' に変わらない。ただし，この場合には，時間的に夕方から夜半近くまででそれほど長い時間とはいえないが，'Kew Garden' に比較すると，格段と長くなっている。ただし，場所が限定される点は変らない。ではそこに集まった人々はということになると，総理大臣を始めとして，Peter Walsh, Mrs. Bruton, Hugh Whitbread, Sally Seaton 以下10指に余る人々が集まっている。従ってそこに展開されるものは，総理大臣を見て人々の心に呼びおこされる様々な思いであり，Mrs. Bruton についていえば，彼女がその日の昼 Mrs. Dalloway の夫 Richerd と食事をした事という半日ほど時間をさかのぼらせながらも，いぜんとして小説全体の時間枠内での時間のシフトの例である。ところが，Peter Walsh の場合になると，彼が Hugh Whitbread を見て，Hugh がパブリック・スクール出身であったことを考える，従ってこの場合は，小説全体の時間の枠を超えて，大きく昔までさかのぼる。あるいはまた，昔の友人で，今は Mrs. Rosetter となっている Sally Seaton の世界，それは Mrs. Dalloway の18才の世界への回帰でもある。

いってみれば，これらの人々の世界は，それぞれが，あの原子の一つ一つとなって，想念の中で，あるいは現実に Mrs. Dalloway の目の前に展開される。そこでは短篇小説の世界ではとても得られなかった深さ，ひろさ，そして厚みといったものが備えられている。なるほど Woolf は自ずから言うごとく特に一つの理論に基づいた作品を書いたわけではなかったかもしれない。しかし出来上った作品は自ずと彼女が評論の中で提示した小説理論が見事に展開されている。それ故にあたかも，一つの理論によってその適用として小説が書かれたと言いたい誘惑は十二分にある。ただここで，ひるがえって考えてみるに，ここに示された世界，ある一つの偶然の契機によって呼びおこされた意識の流れとは，我々日常生活において常に生じ，我々が常に感じていることにすぎない。彼女がそれを言葉にして我々に代ってあらわしてくれたにすぎない。Woolf の小説を書きたいという衝動の発露，表現としての種々の形式が集約的に盛り込まれた作品が *Mrs. Dalloway* だと看るべきである。思えば彼女が 'Mr Benett and Mrs. Brown'

の中で説いた人生を述するということは，まさにこのようなことであるというべきである。あるいはもっと正確にいえば，人生の一断面あるいは一様相といったもの，それをとらえて集積した作品の書き方というべきである。ここには，原子としての人生の断面の集積があるわけだが，そのようなものとしての *Mrs. Dalloway* は，それ自身がまた一つの原子となって Woolf の全体としての作品の一部を構成することになる。

注

(1) Virginia Woolf ; *Mrs. Dalloway's Party* p. 50.
(2) Virginia Woolf ; *Mrs. Dalloway*, Modern Library Edition. Author's Introduction.
(3) Erich Auerbach ; 'The Brown Stocking', *Mimesis*, p. 537.
(4) Ibid., p. 540.
(5) Ibid., p. 541.
(6) Gerard Genette ; *Narrative Discourse*, I. Order.
(7) Ibid., p. 49
(8) Virginia Woolf ; 'Modern Fiction', *Common Reader* 1st series p. 189.
(9) Aldous Huxley ; 'Tragedy and the Whole Truth,' *Music at Night*, pp. 5—6.
(10) Stella McNichol ; 'Introduction', *Mrs. Dalloway's Party*, p. 10.
(11) Vinginia Woolf ; *Mrs. Dalloway's Party*, p. 19.
(12) Vinginia Woolf ; *Mrs. Dalloway*, p. 6.
(13) Ibid., p. 26.
(14) Ibid., p. 28.